

山の本を楽しむ

藤井 論

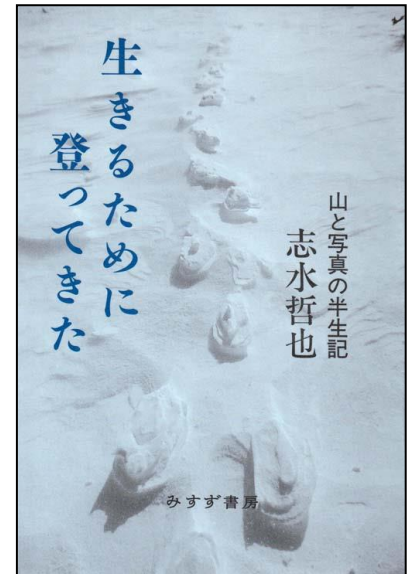
第13回 志水哲也著「生きるために登ってきた」

【概要】

志水哲也は現在50歳、黒部川の全支流遡行、冬の南アルプスや知床半島全山縦走、北海道の冬季縦断など、重厚な登山をいずれも単独で果たした。30歳で山岳ガイドを始め、36歳に写真集「黒部」で山岳写真家にデビューした。夢を追い続けることは、一方で現実逃避ではないかと思いつつも、ひたすら己れの可能性を探してきた著者の渾身の自叙伝である。みすず書房から出版。

【内容のポイントと感想】

志水哲也は高校生の頃から、山をがむしゃらに歩くのが好きだった。しかし団体で登ることには馴染めず、山岳会などは長続きしなかった。単独での難易度の高い岩や沢に挑み、遭難寸前で何度も命拾いをしている。経験を積み上げ、黒部川の全支流遡行、冬の南アルプス全山縦走、知床半島全山縦走や北海道の冬季縦断など、重厚な登山をいずれも単独で果たした。そして次の一節は、それらの経験から文章を書くようになった経緯を示している。



僕の山登りは、最初から文章を書くこととともにあった。単独行中心だと、ひとりで考える時間がたくさんできるから、記録をメモするだけでなく、いつしか山日記に思いを綴るのが習慣になっていった。また、僕が文章を書くようになったのは、日本の登山の先駆者たちが残した書物の影響もある。田部重治、中村清太郎、冠松次郎、深田久弥……。1930年ごろに発生した日本の近代登山は、「旅」の延長のようで、それが好きだ。かつて芭蕉や一茶、種田山頭火は厳しい旅の道中で、求道者のように人が生きる意味を突きつめようとした。そんな旅にもなっていた。僕が最初に本を出したいと思ったのは1988年、22歳のときだ。大井川と黒部川に挑んだ三年間を一冊の本にまとめたかった。その年は「岳人」に黒部の沢を登った記録を連載した。剣沢大滝をはじめとする黒部のおもだった沢の単独行はニュースバリューがあったようで、表紙にもその記録が載った。「岳人」と「山と溪谷」の編集部にも単行本を出したいと話にいったが、「自費出版ならいいけど」と事実上断られた。そんな資金はなかったし、本を出すことは自己満足だとも思ったが、ある意味では世の中に認められて出版したかった。

フリーターで乞食のような生活をしながら山に登り続けるが、知床で知り合った看護師と所帯を持つことになる。次は横浜の都会育ちの著者が黒部に魅せられ、ついに家族で黒部に住み着くことになった一節である。

僕は国内外を問わず、いろいろな場所へ行きたいと思っているが、ベースとして黒部を“地元”とし、その探査、研究をライフワークとしたいと痛切に思うようになった。そこで、1997年6月、妻と息子の稜太郎とともに宇奈月町の町営住宅に引っ越した。昔のように衣装ケースを背負って、列車に乗って運ぶという引っ越しではない。家族三人の転居だったので、今度は「ふつうに」引っ越しをした。

そして山岳写真に芽生え、写真家への道を突き進んで行くことになる。写真は根性であることを物語るような一節であり、その一瞬を待つ撮り方の心構えは大いに参考になると思う。

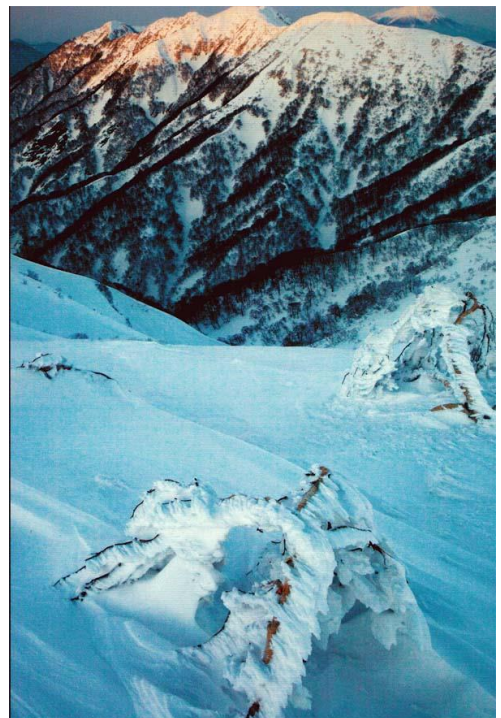
その後、黒部上ノ廊下、岩苔小谷、赤木沢などを歩いた。高天原山荘を夜明け前に出発し、立石に下り、岩苔小谷を遡行して「NHK大自然スペシャル」のときに直登した大滝の下に着く。日の当たらない谷間は、真夏だということにかなり寒い。数時間、足踏みをしながらか滝に日が当たるのを待つ。そして、待ちに待った瞬間がやってきた。ピタリと、少しのズレもなく滝頭から太陽は昇り、瀑水は割れガラスのようにキラリと輝く。その瞬間、僕は「自分にしか撮れない写真」を撮れると確信し、それは僕が写真家になることを決意した瞬間でもあった。登山以上に、「燃えられるもの」を見つけたのだ。可能性を信じ、どこまでできるか挑んでいこう。自分にも、自分にしかできないことが、もしあるのなら、この命をすべて賭けよう。ちなみに、このときの写真は、のちに写真集「黒部」の表紙になった。

NHKで放映されたドキュメンタリー「黒部幻の大滝に挑む」は多くの会員の皆さんが見たことがあると思う。志水哲也の名はこの番組で広く世に知られるようになった。次は制作の一節である。

2003年の秋、NHKの広瀬学ディレクターから、劔沢大滝のD滝に行くドキュメント番組を作る話があった。同世代の彼は大学山岳部出身で、NHKの山岳部に属している。昨年、富山支局に配属になった人だ。まずは九月に下見としてI滝の滝下まで往復し、実際のロケは十月に18日間を費やして行われた。ディレクター、音声、テレビカメラマンなど、13人のメンバーはNHK山岳部と大学山岳部OBが中心の強靱な登山家ばかりで、たぶん国内最難のフィルムエキスペディションとなったのではないかと。(中略)

このロケの様子は「黒部幻の大滝に挑む」として正月番組で放映された。反響は意外と大きく、その後、何度か再放送されたから、見た人も多いかも。道行く人に声をかけられることが増え、「D滝の人がいる」といきなり言われたこともあったほどだ。

志水の出版した写真集の一つに「森の白神」がある。A4版見開きのフルカラーで、四季に渡って白神山地の奥まで入り撮っている。ブナ林が主題であるが動植物の珍しいショットや、白神山地の広大さを空撮で表現した写真群もある。これにより、白神山地の自然が如何に貴重なものであるかを伝える力作となっている。右写真はその中の1枚で、厳冬の白神岳から、ブナ林のスカブラの背後に、夕日を浴びる向白神岳と岩木山が聳えている。この写真集は県立図書館に置いてある。その中の写真の役割についての一節を、最後に示す。



思えば七年前の2004年、地元・黒部での撮影にゆきづまり、フィールドを広げすぎた。まるで“夢追い人”のように日本の幻の滝、屋久島、白神産地と旅をし、今回三冊の写真集をまとめることができた。この三部作を作るのに空撮などかなり分不相応なこともした。やりたいことをやれるだけやったから、悔いはない。これを機に、地元・黒部を撮り直すつもりだ。黒部に住んでいることを活かして、風景写真だけでなく、生態系を学びながら、動植物の写真も撮っていきたい。森が豊かで生き物の楽園のような白神が、僕に教えてくれた新しい可能性だ。

近年、温暖化が進み、白神に限らず、地元の人だけで山を守ろうとしても守れる時代ではなくなった。写真家の役割と責任は大きい。僕がこれから撮っていきたいのは、自然のインタープリタとしての役割を果たすものだ。自然の奥深さと脆さ、尊さを訴えること。失われつつあるものは、残さなければならない。

(つづく)